

岩手県総合計画審議会 第1回若者・女性部会

(開催日時) 令和7年12月22日(月) 13:00~15:00

(開催場所等) オンライン開催

1 開会

2 議事

- (1) 部会長及び副部会長の互選について
- (2) 地方創生10年間の成果と課題について

3 その他

4 閉会

出席委員等

牛崎志緒部会長、佐藤柊平副部会長、西條匡杜委員、櫻井陽委員、細川瑠杏委員

山影峻矢委員、山屋理恵委員、吉田知世委員

欠席委員等

なし

1 開会

○本多政策企画課総括課長 では、ただいまから岩手県総合計画審議会第1回若者・女性部会を開催したいと思います。事務局を担当しております政策企画部政策企画課総括課長の本多と申します。暫時進行役を務めさせていただきたいと思います。

まず、審議会の開催に当たりまして、会議の成立について御報告申し上げます。本日は委員8名全員の御出席ということで、若者・女性部会運営要領第6条第2項の規定によりまして、この会議は成立していることを御報告いたします。

さて、本部会についてなのですが、若者や女性の視点から本県の現状や課題、今後の取組の基本的な方向性などについて御議論いただきまして、また県政の推進に生かしていくといったことを目的に設置させていただくものでございます。委員の皆様からは、ぜひとも忌憚のない御意見を賜りたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

では、本部会の初開催ということで、名簿順に委員の御紹介をさせていただきたいと思います。

最初に、牛崎志緒委員です。

○牛崎志緒委員 よろしくお願ひします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

続いて、西條匡杜委員です。

○西條匡杜委員 よろしくお願ひします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

続いて、櫻井陽委員です。

○櫻井陽委員 よろしくお願いします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

続いて、佐藤格平委員です。

○佐藤格平委員 よろしくお願いします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

続いて、細川瑠杏委員です。

○細川瑠杏委員 よろしくお願いします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

続いて、山影峻矢委員です。

○山影峻矢委員 よろしくお願いいたします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

続いて、山屋理恵委員です。

○山屋理恵委員 よろしくお願いします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

最後に、吉田知世委員です。

○吉田知世委員 お願いいたします。

○本多政策企画課総括課長 お願いします。

では、次に議事に入ります前に本部会と本日の審議の概要、会議の進め方について事務局から説明いたします。

○菊池政策企画課政策課長 政策企画課の菊池と申します。よろしくお願いいたします。

この若者・女性部会の進め方でございます。まず、1の設置の目的でありますけれども、先ほど総括課長から御説明したとおりでございますので、割愛させていただきたいと思いますが、後半のほうに次期プラン等の策定とありますが、この次期プラン等といいますのは、県の施策等を盛り込んだアクションプランというものがございますが、現在のアクションプランが令和8年度までの計画期間となっていますので、次のアクションプランの策

定も見据えながら、皆さんから御意見を、御議論をお願いしたいと考えているところです。

次に、構成につきましては名簿のとおりでございます。

当面の予定につきましては、本日第1回ということで、地方創生10年間の成果と課題ということで御議論をお願いしたいと考えておりますけれども、2回目以降につきましては、各回の御議論、御意見等も踏まえまして、柔軟に設定していきたいと考えております。当面のテーマとしては、例えば魅力ある雇用環境などというところを考えています。

次です。審議の進め方でございます。本日の審議でありますけれども、まずこの部会の部会長と副部会長の互選をお願いしたいと考えております。そして、議事の（2）ということで、地方創生10年間の成果と課題について事務局から御説明いたしますので、その後皆様から御意見をいただければと考えております。3のその他でございますが、本日の主な議題、地方創生10年間の成果と課題でございますが、その他何かございましたら併せて御意見をいただければと考えております。よろしくお願ひいたします。

2 議事

（1）部会長・副部会長の互選について

○本多政策企画課総括課長 それでは、ただいまから議事に入りたいと思います。本来であれば部会長選出までの間、仮の議長をどなたかにお願いして、議事を進めるという流れになりますけれども、僭越ではございますけれども、便宜的に事務局が議長役を務めさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

まず、（1）の部会長・副部会長の互選についてですけれども、資料2として配付しております若者・女性部会運営要領第4条第1項及び第2項の規定に基づきまして、部会長お一人、それから副部会長お一人を互選により決めさせていただきたいと思います。まず、どういった形で互選するかということなのですけれども、皆さんのはうから何か御意見があれば伺いたいと思いますけれども、いかがでしょうか。もしなければ事務局から御提案させていただく形にしたいと思うのですけれども、よろしいですか。

（異議なし）

○本多政策企画課総括課長 では、事務局といたしましては、部会長に牛崎志緒委員に、副部会長を佐藤柊平委員にお願いしたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

（異議なし）

○本多政策企画課総括課長 ありがとうございます。それでは、部会長を牛崎委員、それから副部会長を佐藤委員にお願いしたいと思います。

では、牛崎部会長に一言御挨拶をお願いできればと思います。

○牛崎志緒部会長 改めまして、牛崎でございます。今御推薦頂戴しました。改めまして、私の役割としては今回御参画いただいている委員の皆様の取組ですとかお考えをしっかりと吸収する役割として、どちらかというと若者ではもうございませんので、若者の御意見を

しっかりキャッチする役割としてお引き受けさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

○本多政策企画課総括課長 よろしくお願ひします。

では、これ以降の進行につきましては、早速牛崎部会長にお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○牛崎志緒部会長 よろしくお願ひいたします。少し改まった雰囲気でございますけれども、できるだけ皆様が緊張しないように、いろんなお話を引き出せるように努めてまいりたいと思います。改めまして、よろしくお願ひいたします。

（2）地方創生 10 年間の成果と課題について

○牛崎志緒部会長 それでは、議事の（2）ですが、地方創生 10 年間の成果と課題についてでございますが、初めにこちらは事務局から御説明頂戴してもよろしいでしょうか。

○菊池政策企画課政策課長 それでは、地方創生の 10 年間の成果と課題について、資料 3-1、3-2 により御説明いたします。

こちらのほうに本日御説明する内容を簡単にまとめておりますけれども、まず地方創生に関する 10 年間の成果ということですが、地方創生について簡単に平たく言うと、人口減少ですか、東京一極集中といった課題に対する地方や国の活性化の取組ということが言えると思います。2014 年にまち・ひと・しごと創生法という地方創生に関する法律が制定されまして、その後、国、地方でですね、そういった地方創生の取組が進められてきたというところであります。

本県におきましては、子育て環境の充実ですか、雇用環境の改善、地域の魅力向上といった取組を進めてまいりました。こうした取組の上で、今後更に地方創生を進めていく上での基盤が築かれた 10 年であったと認識しているところであります。

今後の課題についてでありますが、こうした取組を国も地方も進めてきたところではあるのですけれども、やはりなかなか人口減少に歯止めがかかっていないというところが現実でございます。そういったところを踏まえまして、自然減・社会減対策を一層進めていくことが必要というふうな課題を捉えておりますし、あとはもう一つ、こういった人口減少に歯止めをかけるための施策を進めているところでありますが、人口がすぐに昔のように取り戻せるというか、人口が急激に増えていくといったことはございませんので、そういった中でも、人口減少の中でもどういった社会をつくっていくかというような適応策も重要であると考えています。県の取組の基本姿勢等につきましては、資料の中で触れさせていただきたいと思います。

次に、地方創生 10 年間の成果ということで、本県の取組ですけれども、簡単に説明いたしますが、全国に先駆けたトップレベルの子育て環境ということで、例えば保育料の無償化、3 歳未満児第 2 子以降の保育料無償化、こういった動きは全国で広がってきていますが、本県が全国に先駆けて実施した施策というところでありますし、あとは在宅育児支援金ということで、こちらも 3 歳未満児第 2 子以降ということで、在宅で育児を行う世帯へ

の支援金を給付するといったような取組をしております。

次に、岩手の「雇用環境」というところであります。まず1つ目、半導体関連人材育成施設の整備というものでございますが、全国的には熊本のT S M C、あとは千歳のラピダスなど、半導体の企業の取組が注目されているところではございますが、岩手県におきましても、例えはキオクシアとか、東京エレクトロンといったような半導体関連産業の集積が進んでいます。そうした中で、半導体に関する人材育成施設ということで、国の交付金も活用しながら、こちら I—S P A R K という施設になりますが、整備しているところであります。また、右のほうであります、ヘルスケア関連の産学官の連携施設ということで、ヘルステック・イノベーション・ハブというものを整備いたしまして、産学官連携で共同で研究したり、開発をしたりといったようなことを進めております。

次に、暮らしといいますか、岩手の「魅力」というところでありますが、例えはこちらの国の交付金を活用して陸前高田市にオートキャンプ場を整備したり、あるいはクライミング施設を整備して、こちらは 2022 年に大会を開催したりといったようなところであります。

先ほどお話ししたとおり、丸の1つ目ですけども、人口減少の歯止めをかけるまでには至っていないのですけども、岩手県の取組として、丸の2つ目なのですけれども、毎年県民 5,000 人を対象に県民意識調査というものを実施しています。その中で、あなたはどの程度、現在どの程度幸福だと感じていますかというような問い合わせがあるのですが、その中の結果といたしまして、幸福と感じる方が大体半分くらいで推移してきているというところです。そういうた様々施策を進めていく中で、そこの直接的な施策との関連性まではなかなか見えづらいところはあるのですが、そういうた県民の幸福感の醸成にも努めているところであります。

次です。こちらは人口の具体的なデータになるのですが、本県の人口の状況であります、1999 年、このオレンジと青の折れ線グラフがクロスしているところですが、ここを境に亡くなる方と生まれてくる子供の数が逆転しまして、現在では直近で亡くなっている方、死亡数が大体 2 万人くらいで、生まれる子供の数が 5,000 人くらいということで、自然減については大体 1 万 5,000 人くらいの自然減の状態だというところであります。

次に、婚姻率についてです。丸の2つ目で婚外子の少ない日本という記載ありますが、法定の婚姻という手続を経ない夫婦、カップルで子供が生まれるのは日本では非常に少ないです。大体婚外子というのが 2.5% くらいということです。一方、欧米とかですと大体 6 割から 4 割くらいのところで、いわゆる婚外子という子供が出生しているところであります、いずれ日本においてはやはり婚姻というのが子供を生むという段階において非常に大事なステップになっております。こちらのグラフで見ますと、婚姻率、グレー、黒のところですが、これ全国で黄色が岩手県というところでありますし、また折れ線グラフが全国と岩手県の合計特殊出生率を表していますが、岩手県の合計特殊出生率、直近でたしか 1.09 だったと思いますが、そのぐらいになっております。ちなみに、その合計特殊出生率というのは、1人の女性が一生の間に生む子供の平均数ということで、単純に申し上げればそういうた統計の指標になっているというところです。

自然減の全国的な状況ですが、こちらのグラフ御覧いただければお分かりいただけると思いますが、全国で自然減の状況です。特に岩手県に関しては秋田、青森に次ぐ減少率と

なっています。

次に、社会減についてあります。様々な社会経済情勢によって社会減、上がったり下がったり増減あるわけですけれども、最近で言いますと、2018年から2021年、大体これコロナ禍と重なる部分があるのですが、そのときはこの社会減というのが減少幅が縮小した時期であるのですが、2024年あたりからまたその社会減というのが拡大してきているというような状況にありまして、直近ですと大体5,000人ぐらいの社会減というような状況になっています。社会減の全国的な状況ですけれども、23都道府県が社会増、24県が社会減というところであるのですが、やはり大都市圏、ピンクの棒グラフで表していますが、いわゆる東京圏の社会増が大きくなっているというところでありますし、ほかにも例えば大阪ですとか福岡、そういった大都市を抱える県の社会増が大きくなっているというような状況です。

次が岩手の社会減の状況ですけれども、一番右のグラフ、これ令和6年のグラフになりますが、女性のほうが男性より社会減が大きくなっているのがお分かりいただけると思いますし、あとは年齢的に見ますと、大体高校卒業して18歳、19歳あたりの社会減、そして就職期、大学卒業して二十三、四歳あたりの社会減が大きく出ているといったようなことを表したグラフとなっております。

次に、社会増減、本県からの転出入の状況でありますけれども、やはり東京圏への転出が多いわけですけれども、東北、上から2つ目、黄緑のところの転出も大きくなっていると。青森とか秋田から岩手に転入してこられる方も多いのですが、一方で、本県から仙台、宮城に転出される方も多いということで、対東北圏で見ましても、本県からは転出増、社会減というようなところになっております。

次が東京圏の転入超過数で、こちらも黄緑、20歳から24歳という年齢層で非常に多くの方が東京圏に転入しているのがお分かりいただけると思います。

次でございます。その背景としてどういったものがあるかといいますと、東京には資本金10億円以上の大企業が集中しているということ、下のグラフで見ますと東京都に大企業の約52%が集中しているということです。

次のページですが、先ほど企業を御覧になっていただきましたが、大学で見ると、大学の学生数で見ても、大学数で見ても、やはり東京に集中しているということが御覧いただけると思います。

また、こちらは税源の偏在ということで、先ほどお話ししたとおり、もともと大企業が東京に集中しているということもあるのですが、様々なデジタル関連の企業ですとか、そういうしたものも東京に立地するというような傾向が高くて、法人二税、法人事業税、法人住民税、これ自治体に納めるものではございますが、そちらがやはり東京に集中していると。そういうことで、歳入、税財源が東京では豊かだということで、そういうものを元手に豊富な行政サービスを提供しておりますので、やはりそういう面でも、東京一極集中が加速しているというところでございます。

次に、官民投資の集中ということで、本県と東京都の投資規模、平均で約13倍の差ということです。例えばそうですね、最近ですと渋谷で再開発などが行われていると思うのですが、やっぱりああいった大規模な開発というのは、どうしても都市の規模からいっても東京圏に集中してしまいがちということで、そういう官民投資が東京圏に偏在し

ているといったようなことも言えるところであります。

次に、人口の今後の推計でございます。国立社会保障・人口問題研究所という機関がありまして、こちらでは様々人口について推計したり、分析したりしている機関であります。そちらの今後の岩手県の推計について表したものですが、岩手県の人口現在大体 112 万人くらいなのですが、これが 2100 年には 25.5 万人まで減少するというような推計になっています。

次が、様々年齢別に人口を推計したものなのですが、生産年齢人口、青の 15 歳から 64 歳の人口が非常に減っていくということで、やはり生産年齢人口というのが減少していくと、働き手も少なくなり、社会を機能・維持していくというのが難しくなってくるわけでございますが、そういったところでも必要な適応策、施策を打っていくことが必要であろうということあります。

次が公共サービスの立地確率ということです。人口 1 万人を下回っていく市町村が今後増加していくということが見込まれます。この人口が 1 万人を下回ると、様々スーパー等の立地が難しくなってくるということで今後、2020 年のところで薄緑で囲ってあるような今の人口規模の市町村が、下の 2045 年の推計ではこのように 1 万人未満の市町村が増えしていくということで、なかなかそういったサービスの維持というのも難しくなてくるのではないかというところです。

次であります、有効求人倍率です。この 10 年間でいずれの業種も有効求人倍率が上昇していまして、売手市場ということなのですが、これ裏返せば人手不足というようなことがあります。特に労働集約型の業種の働き手が少なくなっているということで、そういったところの人材育成なり確保が必要となってくるというところであります。

次に、女性の L 字カーブと M 字カーブということで、こちら赤い線が女性の就業率、青い線が女性の正社員割合ということで、子育て世代というか、そういった辺りには女性の就業率がちょっと下がって、大体子育てが終わったあたりでしょうか、その頃にまた女性の就業率が上がってくるというのが赤い線です。

ただ一方で、女性の正社員割合、青い線といたしましては、子育てにかかるような時期に正社員を退職されると。子育てに専念してというような様子がこのグラフからうかがえるというところであります。2023 年度には 2013 年度と比較すると改善されてはいるのですが、やはり正社員割合は依然として低い状況であります。

次に、24 ページでありますが、こちらは大企業と中小企業の労働生産性というものを比較したものであります。大企業のほうの労働生産性が高いということで、こちらにある背景といたしましては例えば大企業であれば、資本が潤沢で設備投資などが進めやすいということで、例えばデジタル化を進めて労働生産性を高めたりするわけですけども、一方で中小企業ではなかなかそういった設備投資なども進められない状況もあるということで、労働生産性についてはあまり 10 年前と変わっていないということでございます。

岩手県内の中小企業と大企業の割合を円グラフに表していますが、岩手県は中小企業、大体 9 割が中小企業というところでございます。

次であります、今までお話ししたような課題があるわけですけれども、県の総合計画であります県民計画、こちらはそうした様々な課題に立ち向かうための施策を盛り込んでいるものでございますが、そのキーワードといたしまして幸福を掲げております。こちら

は東日本大震災津波からの復旧・復興では、幸福追求権の保障ということを原則の一つに挙げておりますし、あとは様々国内外で幸福度に関する研究等が進められているということで、そういうことを踏まえて県民計画、「幸福」をキーワードとしています。

計画の理念であります、1つ目であります、県民一人ひとりがお互いに支え合いながらということで、幸福を守り育てる取組を進めるということ。そして、基本目標として、「お互いに幸福を守り育てる希望郷いわて」としております。

そして、こうした計画に基づく県の取組であります、若者・女性一人ひとりの人生選択の中で「選ばれる岩手」、そして施策の方向性といたしまして、可処分所得の向上、可処分時間の向上、若者のエンパワーメント、ジェンダーギャップの解消といったようなことを掲げております。それぞれ政策、方向性を掲げておりますが、こちらについては説明を割愛させていただきます。

次が県の人口減少対策の進め方、体系であります、少子化対策強化の3つの柱ということで、先ほど有配偶率ということに触れましたけれども、有配偶率の向上ですとか、有配偶出生率の向上、あとはやはり少子化の背景には女性の社会減というのがありますので、そういうことを3つの柱に掲げていると。さらに、社会減対策については、雇用ですか、いわてとのつながり、魅力の発信、あるいは交流人口・関係人口の拡大というようなことを柱に掲げておりますし、あとは施策の推進ポイントとしてジェンダーギャップの解消ということを掲げております。

次が少子化対策の柱とそれに連なる施策の方向性、次が社会減対策の3つの柱と施策、取組ということでありますし、資料3-2では具体的な施策を御紹介しておりますけれども、長くなってしまいましたので、説明は割愛させていただきます。

以上でございます。

○牛崎志緒部会長 御説明いただき、ありがとうございました。

さて、様々な数字を見て、御説明をいただいたのですが、ここまでこのところで何か御質問等あれば皆様からお寄せいただければと思いますが、いかがでしょうか。

では、佐藤さんお願いします。

○佐藤柊平副部会長 佐藤柊平でございます。1点確認で、認識をすり合わせていくためにもと思いまして、御質問させていただくのですが、地方創生に取り組んだりしている中で、岩手県、県という役割として市町村とまた違ったアプローチでしたり、重心の置き方という部分があったのではないかと思うのですが、市町村も個別にそれぞれ市町村が人口減少対策でしたりいろんな地方創生の事業に取り組まれてきた中で、これまで岩手県庁さんとして政策の重点的な動きとして取り組まれてきたことは、どういうところに重きを置かれていらっしゃったのか、市町村との連携や役割分担のあんばいなど、本当に感覚的なものでも構いませんので、ちょっと教えていただけるとうれしいなと思っております。

○菊池政策企画課政策課長 例えばなのですが、資料の30ページ、すみません、先ほど説明を漏らしたのですけれども、30ページのちょうど真ん中あたりに「プラスワン」ということで広域振興局を核とした市町村支援のことが書いてございます。市町村におきまして

は、なかなかやはりマンパワーだったりが不足する中で、自ら施策を企画立案したりというところをなかなか支援していく必要があるだろうということで、県の職員が様々そういった、特に町村ですね、小規模町村など支援して子育て施策を一緒に考えたりして、それが実際に町村の施策に生かされて、予算を取って事業を展開しているといったような取組がございます。

○本多政策企画課総括課長 あとは、例えばさっき全国トップレベルの子ども・子育て支援ということで、例えば市町村ごとにやると、やはり市町村の財政力によって子育て施策というのは差がつくのですけれども、そういったものを県がリードしながらどこの市町村でも同じようにやれるようにということで進めたりしています。

あとは、社会減対策も基本的には例えば市町村でも頑張るのですけれども、例えば外に情報発信するとか、広域的にやったほうがより効果があったりというものは広域振興局を置いたりしているので、そこが音頭を取りながらある程度まとまった形でやったりとか、市町村の役割と県がそれを支える役割とか、そういうふうに分けながら進めているのですけれども、さっき菊池課長申し上げたとおり、一方でどんどんこれから人が少なくなっていく中で、市町村だけに任せてもなかなか進まないよねというものは伴走型の支援を行いながら、県も一緒にやっているというような状況です。

○佐藤格平副部会長 ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長 ほかいかがですか、御感想でもよろしいかと思います。

どうぞ、吉田さんお願いします。

○吉田知世委員 資料 12 ページの社会減と社会増について、首都圏や主要都市が増になっているのはもちろんだと思うのですけれども、例えば長野県だったり、福井県だったり、熊本県あたりが増になっている理由などは御存じでしょうか。

○本多政策企画課総括課長 この資料は外国人を含めた形での社会増になっていまして、例えば先ほどの説明でもあった熊本は、今台湾の半導体企業が入ってきたりして、外国人たちが多く入ってきている。福井、富山はもともと高校生の県内定着率というのがすごく高い県で、そういった関係でプラスになっていたりします。

○菊池政策企画課政策課長 直近の1年間で見ますと、外国人も含めなのですが、社会増減は都道府県によってでこぼこ出ているのですけれども、日本人のみの直近の3年間で見ると、社会増になっているのは東京圏、このピンクのところですね、東京、神奈川、千葉、埼玉と、たしか大阪と福岡だけだったと思います。なので、毎年、やはり先ほどお話ししたような産業が地元に来たりとか、そういったでこぼこがあるのですが、長いスパンで見ると、やっぱり東京圏を中心に社会増が進んでいるというところでございます。

○吉田知世委員 ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。吉田さんすごくいい御質問でした。うれしいです。

○吉田知世委員 ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長 海外の視点というのも今事務局からもありましたけれども、私も興味深いグラフだなと思って拝見していました。ほか、いかがでしょうか。よろしいですか。山影さんですかね、どうぞ。

○山影峻矢委員 manorda いわての山影と申します。この資料の中で、全国、そして岩手の比較等々、様々な視点からしていただいていらっしゃるかと思うのですが、全国との比較よりかは、どちらかというと東北圏内と岩手との比較、そういったところが重要になるのかなと感じておりますし、資料 32 ページ、社会減対策の方向性ということで 3 つの柱プラス 1 ということで、岩手県における施策の方向性というのを示していらっしゃるかと思うのですが、岩手だからこそその施策、また、その方向性みたいなものがあれば、ぜひお聞かせいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

○菊池政策企画課政策課長 すみません、長くなってしまったので、資料 3-2 は割愛させていただいたのですけれども、他県でも様々社会減対策というのは岩手県と同様進めているところではありますが、例えば 10 ページですとアンコンシャス・バイアスの実態調査、企業に対して調査して、そちらに対する解消、改善のための伴走支援したりとか、あとは本県の特徴を生かして、例えば 12 ページなのですけれども、岩手の魅力を高める、広めるということで、例えば、みちのく潮風トレイルの態勢の強化ですとか、あとはこれも全国的に現在インバウンドが拡大しておりますが、岩手県ですとニューヨーク・タイムズ紙の行くべき 52 か所に選ばれた盛岡市ですね、そういった強みも生かしながらインバウンドの拡大といった取組も進めているところであります。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。この場が岩手らしい何か取組のディスカッションの場になればいいななんて個人的には考えていますけれども、ありがとうございます。

○菊池政策企画課政策課長 よろしくお願いします。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございました。

○山影峻矢委員 ありがとうございました。

○牛崎志緒部会長 それでは、続いてなのですが、今回第 1 回目の部会でしたので、皆様、先ほど顔合わせのときにも少し自己紹介をそれぞれさせていただいたのですが、皆様日頃取り組んでいらっしゃるお仕事ですとか活動などを御紹介いただきながら、岩手県の現

状や課題など皆様お一人お一人のお考えをお話しいただきたい、そんな場にしたいと思います。

それでは、5分ずつぐらいのところで皆様お一人お一人にお話を頂戴していくのですが、ずっと五十音順になってしまふのですけれども、西條さんからになるのですが、いかがでしょうか。西條さん、トップバッターよろしいですか。

○西條匡杜委員 はい。

○牛崎志緒部会長 何か画面共有されますか。特に5分ぴったり皆さんお話しいただかなくても大丈夫なのですけれども、もしかしたらそろそろとか言うかもしれませんので、よろしくお願ひします。

では、西條さんから伺いたいと思います。お願ひいたします。

○西條匡杜委員 では、自己紹介から。私は、横浜国立大学都市科学部4年の西條匡杜と申します。出身は千葉県の千葉市で、大学に入るまではずっと千葉に住んでいて、そこから大学に入ったときに横浜でひとり暮らしを3年半ほどして、今はいろいろあって、また千葉に戻っている状態で、常に首都圏で暮らしてきた者として今回の会議に呼んでいただいているという認識で参加しております。

シンプルに10年の成果を見た感想なのですけれども、幸福率の微増というのは、この10年間を考えれば十分過ぎるほどの成果なのではないかなと考えました。特にこの10年はコロナの影響だったりとか、あと物価上昇等の影響もあって、何にもしていないそのままの状態、現状維持だったら恐らく幸福度指数というのは下がる一方だったと思うのですけれども、生活環境を向上させるような政策を様々に打ち出した結果、幸福率の微増という形となりまして、これはこの10年を考えたらすごい成果なのではないかと個人的には考えました。一方で、自然減少と社会減少の増加も著しいなと感じまして、具体的な呼び込み効果が不足しているのかなと感じました。

その一方で、幸福度が強くなっているということは、既存の住民がすごく暮らしやすい環境を整えたという点で、今後もし人が大量に入ってきたときに岩手に住んでよかったですなと思ってもらえるような環境が整備できたのかなというのが個人的な感想です。今後迎え入れる移住者を支える環境の整備から、次は具体的な呼び込みの実施をしていくのがいいのかなと、資料にも書いてあったのですけれども、感じました。

課題なのですけれども、自然減少率の高さが全国で3番目ということで、やはり出生数が少ないことが課題なのかなと思いました。どうしても自然減少、自然に減ってしまう、お亡くなりになてしまう人数は、やはり減らすことは今の時代は難しいことですし、医療が進歩したという点でいえばいいことだと思いますので、出生数が少ないことが課題なのかなと感じました。婚姻率の低下が激しいなということが印象でして、就職先でそのまま結婚している人が増えているのが原因なのか、県内でのきっかけ不足が原因なのか、住んだことがないので、ちょっと分からないですけれども、その辺に課題があるのかなと思いました。

次に、社会減少率の高さなのですけれども、これは東北全体の傾向なのかなと思いまし

て、やっぱり進学の際に出ていってしまう人が非常に多いのかなと感じまして、やっぱり就職時に戻ってきてもらえるか、もしくは新たにやってきてもらえるか、要するにUターンかIターンを増やすことが課題なのかなと、見ていて思いました。

神奈川、首都圏に住む自分としての考えなのですけれども、首都圏にずっと暮らしている人は、基本的にそのまま東京で就職する人がすごく多いなど、自分の身の回りの人を見ても感じますし、逆に地方から出てきた人もほとんど全員が首都圏に残ることを選択していて、私の大学の知り合いだと、偏っている可能性もあるのですけれども、地方から出てきた人でそこに戻るという選択をした人は1人しか僕の知っている中ではいなくて、長野から来た人が長野の会社に入るというので、戻るということを言っていたのですけれども、逆にそれ以外の人はみんな東京で就職しているので、やっぱり一度大都市圏に住んでしまった人を地方に連れ出すには、やっぱり何らかの強力な理由が必要なのかなと感じました。地方暮らしになるかなと語っている人も大半は理系の研究職の人なので、理系の研究職の場合は、研究所とかが地方にあるからそこに住まざるを得なくて、行く人が多いかなと思いました。何らかの強力な理由をつくらないと、一度大きい都市に住んだ人を連れ出すのは難しいので、僕は関係人口を増加させることが次の10年では大事なのかなと思いました。

これは本当に個人の印象なのですけれども、首都圏で岩手を感じられる機会は少ないと感じますし、岩手に限らずやっぱり地方が入り込む区域は今はいのかなと感じました。なので、本当にこれは個人の感想というか、思ったことなのですけれども、個人レベルの交流ではなく、企業やサークル、大学レベルでの交流を図ることで長い間関係が続く人を増やせるのではないかと感じました。私も大学の授業を通して岩手と今もここまで縁をつくっていただいたので、やっぱり企業や大学といった集団レベルでの交流を図ることがよいのではないかと、今回の資料を読んでいて思いました。

以上です。

○牛崎志緒部会長 西條さんありがとうございました。大変勉強になりました。ありがとうございます。

では、どんどんいきたいと思います。では、櫻井さんいかがでしょうか。

○櫻井陽委員 いわて地域おこし協力隊ネットワークという組織に所属しております櫻井陽と申します。今ネットワークでは理事を務めています。

自己紹介を簡単にさせていただきますと、私は出身が一関市でありまして、大学進学で仙台のほうに出ていまして、就職でも仙台のほうに就職したのですが、大学時代にワークショップで一関市に関わる機会をいただきまして、それでUターンで地域おこし協力隊という形で戻ってきております。9年前に戻ってきたのですけれども、合同会社ハルノ企画という会社を立ち上げまして活動しているという状況です。

岩手で暮らすというか、仙台圏で暮らしていたのですけれども、岩手での暮らしとか、岩手の人たちとの仕事をしていきたいなみたいなところでUターンで戻ってきたところもありまして、この若者・女性部会のお話とともにそれに関わるような話なので、いろいろディスカッションできればと思っているのですけれども、いわて県民計画のほうで「幸福」

をキーワードとした策定を、ページで言うと 27 ページになると思いますけれども、そちらを推進するというのはすごくいい考え方かなと思っていまして、東京圏との部分でお金の部分ですとか、仕事の選択肢の多さとかという部分では、どうしてもかなわない部分はあるかと思うのですけれども、暮らしも含めた幸福度というところを追求していこうというのは岩手独自の考え方であっていいのかなと思っております。

その中で、一方でなのですけれども、30 ページですか、基本的な考え方で人口減のところに、人口の自然減・社会減対策というところがあると思いますが、少子化対策というところに力を入れようみたいな形にはなっていると思うのですけれども、これというのはちょっと言い方悪いかも知れないのですけれども、女性の方々とか、我々結婚した方々に対して生んでほしいみたいな、何かそういうメッセージを強く感じるところにちょっと違和感を覚えていまして、生まれてくる子供に対して幸せな社会をつくろうとかという表現であれば何となく分かるようなところではあるのですけれども、有配偶率の向上みたいな言葉になってしまふと、結構強烈な言葉だなと思っていまして、最近見た S N S で炎上はしていないのですけれども、お隣秋田県の話でこういった思い込ませるような自治体の施策に対して違和感を持つ女性が秋田県から出ていくという記事を見たのですけれども、そういうのに違和感を覚えますみたいなメッセージを出していた方がいたのですけれども、そういったところでこういう言葉ですか、そういったところに何か表現を変えたりとか、メッセージは必要だとは思うのですけれども、分かりやすさですか、そういったところは必要だと思うのですが、何か違和感がある部分というところが多分若者・女性の中であるかなと思いますので、その辺の施策に反映していく言葉に対しても柔らかい表現を使ったりですか、検討していく必要があるのかなと思っております。

有配偶率の向上とかという言葉と幸福の追求というところの言葉とのギャップがすごいなと思いました、確かに自然減で子供が減って、プレーヤー、地域の担い手が減るというのは大きな課題かもしれないのですけれども、自分たち世代の押しつけみたいなところもあると思いますので、その辺のギャップ感みたいなものも次期の策定の中で解消できていったらしいのかなと思っております。

ちょっとまとまっていますけれども、そういったところを感じるところがありました。

○牛崎志緒部会長 櫻井さんありがとうございます。自己紹介の中でもクロストークしたぐらいで、山屋さん今のどう思いましたかと言いたいぐらいなのですけれども、後ほど皆様とディスカッションをするとして、櫻井さんありがとうございます。

では、佐藤格平さんお願いしてもよろしいでしょうか。

○佐藤格平副部会長 ありがとうございます。私のほうからは簡単に自己紹介と、あとは普段取り組んでいることでしたり、あと今回の総合計画の策定に向けたところで幾つか共有ができるかなと思っております。

簡単に資料を共有しつつ、お話をできたらなと思っています。自己紹介を改めてさせていただきますけれども、佐藤格平と申します。平成 3 年に一関市に生まれまして、大学進学で一度私も上京しました。その後に、地域づくりの勉強をしていたのですけれども、大学 1 年生の終わりに東日本大震災が発生しまして、そのとき首都圏において岩手と関係があ

る人たちがどんどんいろんな活動をし始めていたりして、私の中ではそういういたきつかけが割と大きくて、東京にいながら岩手に関わるということを 2011 年ぐらいから始めていたような経緯で今につながる活動を始めています。

地域の魅力とか価値をもう少しどんどん発信できないかなということで、2014 年に地域プロモーション専門の PR 会社に就職しました。ちょうど増田前知事が「地方消滅」というようなキーワードで地方創生の動きが始まっていったタイミングです。移住促進や地方創生事業で全国のいろんな自治体をお手伝いしていたのですが、ちょうどお客様が岩手県内にもございまして、そこで定期的に岩手にも帰っているというような状況でした。その中で、地元で DMO をつくるという動きがあり、DMO を設立する地元経営者の先輩方から「終平おまえも帰って来て一緒にやろう」とお誘いがあり U ターンしたような感じです。ただし、観光を推進するというよりも、私も割と櫻井さんと意識が近くて、担い手やプレーヤーが地域にいないとそもそも岩手のいろんな産業や地域社会が維持できない、担い手を一人でも増やしていくこと、その担い手の解釈ももう少し拡大していくいかと考え、一般社団法人いわて圏を設立しました。岩手に関係している人とかいろんな物事を全部いわて圏、いわて圏民と拡大解釈して、全部岩手のために生かし尽くしてやるという、岩手都合極まりない思想を持った会社なのですが、そうした考え方で立脚して事業を行っております。

私自身は、大学時代から常に岩手との関わりを持ちながら外にいるという状況でしたので、そういうことが岩手にコミットしていく気持ちを高めたり、自分の動きが岩手にとってもメリットに働くのかということを掴んでいったりする機会になりました。

関係人口の取組、県庁さんの取組であれば県南広域振興局さんの仙台における関係人口の事業でしたり、地域振興室さんで取り組んでいる遠恋複業課という取組と一緒に立ち上げたりしました。あとは、移住の中でも地域おこし協力隊の採用ということで、本年度までに延べ 120 名ほど岩手県内の隊員増加につなげた実績が出てきていますし、移住促進の、これは定住推進・雇用労働室さんの事業「いわて暮らしを学ぶ学校」で移住促進にも取り組んでいます。基本的にはいろんな世代で岩手といろんな形で関わる接点をつくっていくのが私の中のミッションとしてございます。

そういう取組を進めている中で、「縮充」というキーワードに着目しています。人口減に対して、基本的に岩手のいろんな問題は人口が減ることによって、いろんな物事に課題なり問題が生じるというところがあると思いますし、その根本的な原因でそれこそいろんな違和感とか感覚の乖離、意識の乖離みたいなものがあると思うのですが、人口減によっていろんな出る諸課題を何とか維持しようとするよりも、どちらかというと今後は縮小することを前提とした観点に思い切り立って、单刀直入に言えば撤退戦をいろんな施策や事業を縮小しながら充実する、充実させていくための相反することをどう両立させるかというアプローチがこれから重要になるのかなと思います。私としてはそういう観点を持ちながら、この総計審に臨めたらよいなと思っております。

すみません、ちょっと長くなりましたが、以上でございます。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。キーワードいただきました、「縮充」ですね。

ありがとうございます。

では、続きまして細川瑠杏さんお願ひします。

○細川瑠杏委員 細川瑠杏と申します。簡単に自己紹介をさせていただきますが、お茶の水女子大学の4年で来年から社会人になる年です。生まれから高校生まで紫波町に住んでいて、大学進学時に上京してきました。

この部会には、岩手わかすフェスという団体から声をかけていただき、参加しました。この団体は、東京から岩手を盛り上げようとする若者や社会人、学生などで年に1回「岩手に関するイベント」を開催しており、今も来年2月のイベント開催に向けて運営しているところです。

私は、上京時にホームシックのような状態になり、落ち込んだことがあったのですが、そういった時も岩手のことを調べると心が落ち着くことが多かったので、やはり、岩手との関わりをずっと持ち続けたいと思い、岩手わかすフェスに参加しました。

ほかにも岩手県学生会館で学生交流イベント「いわてジャム」というものを開催し、岩手県の様々な学生の方とゲームであったり、学校でどんなことをしているかみたいなことをすごくラフに話せる場を作っています。これからも、東京で岩手の方とつながる環境を作り続けていきたいと思いましたし、関わり代がまだまだあるなと思ったので、このようなイベント運営などは継続したいと思っております。

私自身女性ということで、子育てに重きを置いてお話をさせていただきます。事前にいろいろ調べてみましたが、岩手県は「いわて女性活躍認定企業」という取組をされており、これは女性のキャリアアップを狙った取組であると思います。私自身まだ子育てを考えたことがないので、うまく言えないのですけれども、キャリアアップというよりは、働き方の柔軟性であったり、フルリモートもそうですが、リモートワークや時短勤務ができるとか、働き方に柔軟性を持たせることがすごく子育てにおいて重要なのかなと感じました。

資料13ページの社会減のグラフなのですけれども、コロナ禍でリモートワークが増加し、どんどん主流になってきている世の中で、子育てをするとなると、リモートワークが可能であるなど、そういう企業に所属したいという考えも増えてくると思うので、社会減の増加にはこのような理由があるのではないかと考えました。

先ほど櫻井さんがおっしゃっていたように、有配偶率と幸福率という関係性について、私も、もやもやというか、そういうのを感じた部分もあったのですけれども、やはり女性が子供を生むのですけれども、男性も子育てしていくべきであると思うので、女性を優遇するだけではなく、子育てを一緒にしてくれる男性にも何かメリットであったり、そういう取組があると、女性も配偶者が協力してくれるから一緒に子育てを頑張ろうという前向きな気持ちになれるのではないかと個人的には考えました。

あと、ジェンダーギャップをなくすということは、簡単に言葉にはできるのですけれども、やっぱり生まれてくる役割というか、子供を生める生めないという性差があると思うので、ここについてはこの機会を通じていろいろ自分でも学びながらいろんな意見を出せたらなと思っています。

以上です。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。わかつフェス、今日御参加の委員の皆さんは2月ぜひ全員行っていただきたいと思います。ありがとうございます。
では、続きまして山影さんお願ひいたします。

○山影峻矢委員 manorda いわての山影と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、弊社の会社紹介をさせていただきますと、弊社は2020年に設立された岩手銀行グループの地域商社となっております。金融機関として培ってきたネットワークですとか、信頼とか、そういったものを基盤に地域に新しい価値を生み出すことを目的として活動している会社になっております。

弊社の強みといたしましては、デザインとイノベーション、これを軸に地域が抱える課題を事業として解決していく点にあると考えております。地域企業や自治体と伴走しながらプランディング、商品開発、販路開拓、あとは公民連携事業など幅広く支援させていただいているという実績がございます。

もう一つ、こちらは弊社の強みであるかなと考えているのですけれども、単なるアドバイスにとどまらずに、事業の構想段階から実行、そして継続的な成長を見据えた実践的なプロジェクトとしてともに取り組むということを大事にしているところでございます。そのほかにも地元のクリエーター、デザイナーとかと呼ばれる方々ですとか、専門家、そして企業、地域の企業の皆様ですね、そういった方ともつなぐということを役割として担っております、デザインの力を活用した企業の魅力向上ですか、地域ブランドの強化というところにも力を入れているというところでございます。こういった活動によって、企業の競争力の向上ですか、地域全体の魅力発信を同時に実現していくことを目的として活動しております。

さらに、最近では再生可能エネルギー関連事業ですか、自治体向け業務支援など社会課題の解決に直結する分野などにも積極的に取り組んで持続可能な地域づくり推進しているというところでございます。

ここまでが弊社、会社のざっくりとした御紹介になっているのですけれども、ここからは私が感じている課題というところでお話しさせていただきますと、私自身花巻市の出身でございまして、大学で東京に出まして、就職を機に岩手に戻ってきたという背景がございます。私の時代という論点から話をし始めると、私の就職活動期に比べてUターン、Iターン人口が減少しているという点が、地域の企業様の人手不足、後継者不足として課題になってきているかなと感じているところでございます。

ここに対する根本的な改善策が見出せているところではないのですが、そういった地域企業だけで解決できる問題、そして産学官金連携みたいなお話の中で解決していくべき問題みたいなところというのは、いろんなすみ分けがあるのかなというふうに考えております。今回の部会の中のお話でもそういった領域を明確化し、各アクションプランに落としていったときに進めやすくなるのかなと捉えておりますので、そういったところも私の方からはお話をさせていただきたいなと考えているところでございます。

また、地域活性化事業みたいな側面で、弊社ですと、地域活性化事業を行う中間支援的な事業を行っている会社さんの収益体制が取りづらいというのが地方公共事業の側面の一つとしてあるかなと考えております。そういったところも、見直しをしつつ、やはり地域

がよくなっていくような展開を見据えていくというのが現状の課題としてあるかなと考えているところでございます。

そういういた側面から本部会に協力させていただければなと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

以上でございます。

○牛崎志緒部会長 山影さんありがとうございました。

では、続いて山屋さんお願ひしてもよろしいでしょうか。

○山屋理恵委員 岩手県男女共同参画センターから参りました山屋と申します。

私は、今回の話で、先ほど櫻井さんが話してくださったように、あつ、こういう若者たちがこのように岩手にいてこういう活動してくれている、ということにすごく希望と幸福感を持つことができました。こういった人たちが増えるというか、こういった取組が増えることがこの岩手の持続可能につながっていくのではないかと思っています。

先ほど来お話がありましたようなこのデータですね、13ページ目の本県の年齢別、男女別の社会増減、こちらの方を見て、なぜ女性の方が突出しているのか、例えばそれを皆さんに投げかけたときにどんな答えが出るのでしょうか。皆さんにもディスカッションで聞きたいし、県庁の皆さんにもどんなふうに捉えているのかちょっと聞きたいけれども、多分誰も答えを持っていないとは思います。ただ、そうなった中で、30ページ目にあるような今後の県の取組でジェンダーギャップの解消というのが今後の取組全体にかかっているこの視点があることが、私は、岩手の強みであって、幸福への近道かなと思っています。

ちょっと話大きくなるのですが、SDGsは2030年までの目標としていろいろ掲げられています。その中にジェンダー平等だとか、全ての人に福祉をだとか、いろんな取組がありますが、ではその次は何なのかと見ると、御存じの方もいらっしゃるかもしれません、ウェルビーイング、持続可能なウェルビーイングが次の目標と今言われています。ウェルビーイングというのは幸福な状態が個人にあることと、社会にあることと、あとは健康ですね、身体にあること、こういった全ての状況が幸福であることがウェルビーイングであって、それが持続的にあることをSDGsの次の目的に世界はしています。

そんな中で、日本というのはジェンダーギャップ指数、ジェンダーギャップがとても遅れていて、まだまだ手が届かなくて、どうしてこういった生き方とか、地域での暮らし方に男女差があるのかということを考えられることがすごく重要だと思います。なので、今回のこの部会の在り方もそうですし、県が示している基本的な考え方でジェンダーギャップの解消があること、本当にここを強く進めていっていただくことが大事だと思います。

人口減少というと、どうしても子供を生むという話になってくるし、日本の場合は先ほどお話がありましたように結婚してから子供を生むというような形が法的にも整えられていますけれども、そうなることは全て子供を生む臓器を持っている、性を持っている人にはかかる話になってくると、とてもそれはプレッシャーでもあって、自分の生き方とか人権を真ん中に思ったときに、はてな、もやもやがあるのですね。でも、その勉強とか、私たち教育というのはきちんと受けてきていました。

今48歳から47歳ぐらいの人たちが実は一つのポイントの年代なのですけれども、何か

というと家庭科の授業が男女別だったかどうかというのはそのときで実は分かれるのです。それより上の人たちは、家庭科で男性はこういうもの、女性はこういう勉強しましょうと分かれてきた。実はそういう年代もあって、そういう人たちと私たちは今共に生きて、同じ仕事をしたりだとか、生活を共にしたり、親子でいるわけですよね。なので、そういうところの世代間ギャップというのはすごく大きい。なので、何でだろうなと思ったり、そこでいろいろなことが起きてしまうのは、もしかしたら、今が時代の転換期、移行期なのだと思って、それを話し合うところが今実は重要な時期に来ているのではないかなと思います。なので、今回この部会にこの項目を入れてくださったこと、入れさせていただいたこと、ありがとうございますし、きっといろんなことをお話しさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○牛崎志緒部会長 勉強になりました。ありがとうございます。

では、続いて吉田さんお願ひします。

○吉田知世委員 よろしくお願ひします。簡単に自己紹介で、盛岡市出身で、今は都内で社会人4年目をしております。26歳です。私は、2018年に大学入学を機に上京しまして、そのタイミングで岩手わかすフェスの実行委員会に入りました、今年で8年目になります。今は細川を中心に大学生をサポートするという立場で実行委員をやらせていただいております。

今回お声がけをいただいたきっかけは、細川と同じく実行委員だったからというところもあるのですけれども、一人の岩手県出身の女性として、若者としての立場としてこの部会に参加することができて、本当にいいタイミングでお話しいただけたなと思っております。26歳となると周りが結婚し始めたり、出産、育児をし始めるという年齢にもなって、自分自身もちょうど人生の転機だなと思える機会なので、この機会に改めて岩手県が行っている取組だったりとか、あと皆様の御意見みたいなのを聞いた上で、自分自身の人生も考えていきたいと思いますし、周りの子のことも考えながら皆さんに一人の若者としての意見をお戻しできるように頑張っていけたらなと思っております。

今回のこの部会でお話しさることを考えたときに、今自分が、先ほど言ったみたいにちょうど結婚とか出産という転機があると思っているのですけれども、その人生の中で拠点を移すという転機は、大学進学、就職、結婚・出産の3パターン、3回あるかなと思っています。

大学進学に関しては、そもそも学びたいことが岩手県内にあるかどうかで変わってきてします。もし学びたいことがない場合は必然的に県外に出てしまうので、ここは政策として打ち出すことは難しいと考えていて、同じく就職も働きたいような職種が県内にあるかどうかとなったときに、これもまた大がかりなものになってしまうかなと。

3つ目の転機の結婚や出産に関しては、首都圏以外は意外と足並みが同じで、政策や今後の取組によって、Iターン、Uターンが、大学進学や就職よりは見込めるのではないかと思うので、私ぐらいの世代をどうゲットするかというのが一番効率的といったらあれですけれども、一番ポイントとなる世代なのかなと思います。

その中で、先ほどの資料を拝見したときに、子育て環境がすごく拡充されているという

のが感じられて、すごく魅力的だなと思ったのですけれども、正直、そういう取組をしているとか、そういうものがあると知らなかつたです。

県外に出てからは、県内の情報に触れるることは圧倒的に少なくなり、私自身はまだわかつフェスの実行委員をやっているからこそ、いろんな方からお話を聞く機会はあるのですけれども、このような活動をしている人は本当に少ないので、みんな県内の情報を知らないと思います。

そういう情報は早くタッチしておく分に損はないので、中学校などで卒業生と交流する機会をつくり、その人がどういう人生を歩いていたかというのを聞くだけでも中学生たちが自分の人生設計を描くときに、「ああ、こういう人いたな」みたいなことが頭の片隅に思い出されるかもしれませんし、高校だと更に深く考へると思うので、高校で改めて「岩手県はこういう政策をやっている」のようなことを在学中の段階で早めに周知し、頭の片隅に「岩手県ではこういうことしている」とか「こういういいところがある」というのを入れておくだけで、選択肢の1つに岩手県が上がってくるのではないかかなと思いまして、知らないという状態を防ぐためにも、早めに知らせておくということはどんどんやっていたほうがいいのではないかと今回の政策を拝見して思いました。

あとは、私が一番最後なので、皆さんのお見を聞いているときに、本当にジャストアイデアで思ったのは、「結婚・出産で、居住地が配偶者の方についていくことになりました」とか、「仕事の関係で東京にいなければいけないです」という方がいたとしても、フルリモートの働き方ができるのであれば、県内企業に就職し、居住地は県外といった働き方も今後できるのではないかなと思いました。

ただ、その場合は県内に住んでいないので、県内経済を回していくのかと思ったり、けれども関係人口の創出という面を考えると、そういうフルリモートで県外在住ということもありなのかなとか思ったり、そういったジャストアイデアみたいなものも今後皆さんとの議論の中でいろいろ言い合えたならなと思いました。

以上です。引き続きよろしくお願ひいたします。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。この後すごく吉田さんと話したい衝動に駆られています。

○吉田知世委員 ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。

すみません、最後、私たちと自己紹介させていただきます。私は、牛崎なのですが、もともと牛崎というのは花巻に多い名字なのです。あと、全国的に見ると熊本と北海道に多いらしいのですけれども、両親が教員だったというところもあって、生まれは釜石で、久慈に住んだり、花巻が一番長いのですけれども、大学で県外に出て就職をして、そして戻ってきた。今私自身岩手県が設置する若者の就労支援施設にあります。ここに籍を置き始めたのは28歳ぐらいになりますので、そこからなかなか長い期間ここで岩手県の若者のためにということで、非常に勉強させていただきながら岩手県内の若者、そして企業、先生方と日々やり取りをさせていただいている。

ジョブカフェのことを少しお話をさせていただきたいので、資料を共有します。盛岡市内の菜園センタービルというところの5階に設置されているのですが、ワンストップという話をしましたけれども、我々が関わっているのは高校生、大体15歳ぐらいから50歳ぐらいまでなかなか長いキャリアの伴走をさせていただいているので、高校時代に接点を持った方が就職をして、転職をしてという長いキャリアを御一緒させていただいているというところなのです。

それに加えて、学生だけではなくて、その学生を支える側というか、保護者の方であったり、教員の方であったり、そして企業の方であったり、そういったステークホルダーの方々とどうやったら岩手に就職してくれるかなとか、岩手で生き生きと働いてくれるかなというところを御一緒に考えているところなのですが、もう一つこういった「シゴトバクラシバいわて」というUターン、Iターンの総合サイトの運営をジョブカフェいわてでは行っています。最後吉田さんのお話にもありましたけれども、我々としては一生懸命プッシュしているのですが、なかなか県外の学生であったり、あるいは県内の学生ですら我々のサービスが行き届いていないというところをいつもいかんなと思いながらいろいろと取組を検討させていただいているのですが、ちょっとここで次のディスカッションにもつながるお話を思いまして、共有をさせていただきたいのですが、実は県内の企業の皆さん、先ほどの新卒の採用を考えていらっしゃる企業の皆さん、我々の「シゴトバクラシバいわて」というところで求人を掲載していただいているのですが、そういった企業の皆様に10月、世の中でいえば内定式を行っている時期に採用活動したのだけれども、どのぐらい採用できていますかというのを毎年調査しているのですが、何と79.3%も未充足、これ例年大体8割弱ぐらいのところ、10月、本当に内定者を迎えるというタイミングで8割弱ぐらいの企業様がまだ採用できていない、確保できていないという企業様がいらっしゃっていて、予定数の半分にも満たない、あるいは内定は一人もいないという企業がこのぐらいいる。こういった中で、企業が努力をしてないかというと、決してそういうことではなくて、企業の皆様もやることはいろんなことを検討していただいて行っているわけなのですから、採用ができないというと、本当に企業の今後の経営というところにも大きく影響を及ぼしてしまう、こういった数字も皆様に共有しようかなと思ってお伝えしました。

もう一つ、ジョブカフェいわては、企業の皆様の従業員満足度調査というのを行っております。1,200人ぐらいの県内企業の従業員の皆様にアンコンシャス・バイアス、先ほど来キーワードとして何回か出ていますけれども、「知ってる?」という、言葉を知っているのと知らないのが問題ではないのですけれども、やはり知っていたというのがまだまだ15.3%ということで、アンコンシャス・バイアスというのを身近で感じた割合というのが約5割ですね。例えば育児、家庭事情に関するアンコンシャス・バイアスや時間外労働に関するアンコンシャス・バイアスなどですね。先ほどどなたかおっしゃっていました、県外から、あるいは岩手で働いていただく方々のための、西條さんだったかな、環境づくりというのがすごく大事だよねという話ししていただいたのですが、こういった側面から見てもいろんな取組がまだ行き届いてないなというところを皆様に一旦ここで共有させていただこうかなと思いました。

ということで、ぜひこの後も皆様と様々なディスカッションを進めていきたいところでご

ざいますが、この後今日のお時間でいくと 15 時まで皆様のお時間頂戴しているのですが、最後 14 時 55 分ぐらいまでのところで皆様と少しやり取りをするお時間を取りたいかなと思っています。本日の課題を振り返りますと、地方創生 10 年間の成果と課題というところに関連して県が進めるべき今後の方向性や重視すべき視点、「岩手らしさ」というキーワードなども出ました、「縮充」というキーワード。そして、岩手の理想の姿は何だろうとか、委員の皆様が日頃感じていらっしゃる問題意識など、内容は何でも結構ですので、先ほどの自己紹介からの引き続きディスカッションもできたらと思っています。

御発言の際に、今日はオンラインで改めて皆さんに会いたかったなんて思いつつも、オンラインですので、ぜひ挙手ですね、リアクションボタンから挙手いただきまして、ディスカッションを進めていきたいと思います。

では、皆様からぜひ挙手をいただければと思いますが、どうでしょうか。

山屋さんかな、ありがとうございます。山屋さんお願ひします。

○山屋理恵委員 先ほど私も例に挙げさせていただいた 30 コマ目の岩手県の取組、(3) 基本的な考え方で、ジェンダーギャップの解消とあったのはすばらしいし、これが大事とお話しした横に、やはり少子化対策の強化の 3 つの柱のところで、「有配偶率の向上」、「有配偶出生率の向上」、この言葉を何とかしてほしいなと思っています。この場合に例えば結婚を増やす、夫婦の中での子供たちを増やすといったときに、やはりいろいろな事情のお子さんたちやお母さんや御家庭があります。今いろんな家族の形があります。養子縁組までいろんな形もあるので、全ての人を包摂するインクルージョン施策をしようとしている岩手県にそぐわないのではないかと思うのです。ただ、法律的には例えばこういう法律制度の中で子供を増やすのがそうかもしれませんけれども、これはやっぱりちょっと嫌な話、炎上するような話にもなっていくのではないかと思います。いろんな生き方があっていいということが一人一人が幸せに生きることであって、インクルージョンさせるものもあり、それが岩手にはたくさんのいろんな生き方や性別を持った人たちがいる、 L G B T の人たちもいらっしゃいます。こうした中で家族をつくっていく、人口を増やしていくというところに、この「有配偶」だと、こういった言葉を少し変える、違うような表現だと、やっぱりもやもやするという感覚の人たちがようやく増えてきた、ようやく岩手でそういう教育とか知識を持った人たちが増えてきているところでちょっと後退してほしくないなと思いますので、そういった表現とか、何か変えてもらえたならなと思います。

ちょっと私の言い方がきついかもしれませんけれども、男女共同参画の方針にも合っていませんので、ジェンダーギャップの解消の趣旨にも合っていない表現でもあります。

○牛崎志緒部会長 山屋さんありがとうございます。いかがでしょうか、事務局の御発言の前に、私ぜひ細川さんや吉田さん、先ほど櫻井さんもそんなお話もありましたけれども、いかがでしょうか、少し委員の皆様にもお話伺ってみてもよろしいですか。ありがとうございます。細川さんも「もやもや」とキーワードに使っていらっしゃいましたけれども、細川さんいかがでしょうか。

○細川瑠杏委員 はい、そうですね。何て言つたらいいのですかね、うまく言葉にできな

いのですけれども、有配偶率の向上が幸福につながるかというと、そこはうまくつながらないのではないかというような。

有配偶率というと、やっぱり配偶者がいらっしゃるとか、そういう方のことを指すと思うのですけれども、やっぱり配偶者がいなくて自分一人でも幸福度が高い方もいらっしゃるなと思いますし、やっぱり配偶者がいるから幸福度が上がるという表現がちょっと違うのではないかというのが私からの意見です。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。

櫻井さんから、生まれた子供を幸せにしていこうとメッセージを展開した方がポジティブに考えられるのではないかなんていいうお話をありましたけれども、櫻井さんから何か追加ありますか。

○櫻井陽委員 そうですね、言葉に関してはもしかしたら岩手県庁さんの中で適正な言葉表現が必要で、こういった言葉になってしまったのかなというところがあるかなとは思ったのですけれども、もし総合計画として一般に出ていくという言葉でしたらちょっと表現を変えたほうがいいのかなというところもあります。

ジェンダーギャップの解消のスライドの 30 ページのところだと有配偶率の向上というところは、この 1、2、3 全てに違和感を覚えているわけではなくて、特に 1 番のところが先ほど細川さんが言ったように幸福の実現みたいなところとちょっとギャップがあるのではないかというところはあります。

2 番の有配偶出生率の向上みたいな子育てがしやすいまちだと、岩手県はそういうところだというところのメッセージ性というか、目標としてはいいのかなと思うのですけれども、この言葉というところがちょっと気になってしまいます。そうですね、岩手の子育て環境が今施策の中で取組はすごく充実してきているのかなと思うのですけれども、ここがひっかかってしまったらもったいないなという気持ちで先ほどお伝えさせていただきました。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。この件どなたか委員の皆様から御意見おっしゃりたい方いらっしゃいませんか。

どうぞ。

○吉田知世委員 自分の中でまだまとまり切れてないのですけれども、2 番の有配偶出生率の向上とその下に書いている全国トップレベルの子ども・子育て施策の展開がイコールになっていない気がしていて、子育て施策の展開により、「岩手県で結婚して子供を生もう」とはならない気がしていて、「子育てしやすいまちだからいいな」で移り住むきっかけにはなると思うのですけれども、出生につながるわけではないというか。

出生につながるイメージはどっちかというと、例えば補助金が出ますよとか、子供を生んだらこういういいことがありますよということであり、子育て施策を展開したから子供を生もうとはならないと思っていて、それぞれ 1 番、2 番、3 番の主題の表現がだいぶ硬くて、かつ伝わりにくい、そういうふうにいろいろ捉えられてしまう言葉だと思うのですけれども、「く」の字の括弧の中に書いていることに関してはすごくいい言葉というか、いい

施策というか、そう思うので、主題は書かず「出会いの確保・創出」、「全国トップレベルの子ども・子育て施策の展開」、「雇用環境の改善」という形で柱としてよいのではないかなど思つたりはしました。

以上です。

○牛崎志緒部会長 そうですね、どんどんこんなお話ができたらしいなと思います。

佐藤さんからもチャットでコメントをいただきましたね。

○佐藤格平副部会長 そうですね、よくも悪くも、ある種政策手段、政策用語としてのものとして入っているかと思うので、庁内の中の共有は図りやすいものになるのだと思うのですけれども、考え方の順番というのですか、有配偶率、先ほど櫻井さんがおっしゃられたことに結構つながる部分あるのですけれども、この何とかの向上、何とかの強化みたいな拡大とかは手段でしかなくて、プロセスのその先にどういう岩手にするかみたいな、そういう言葉があると、この柱なり社会減、少子化対策の柱という部分がより賛同や理解を得られやすくなるような感覚を持っています。すみません、ちょっと補足でございます。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。

事務局いかがでしょうか。

○本多政策企画課総括課長 まず、今ジェンダーギャップの解消の関係で、特に資料の表記について、実はもともと経緯からすると何で岩手県ってこんなに子供が少ないのかなというような分析をやっていったときに、その分析の結果が一つこういう、まず結婚する人が少なかつたりとか、結婚しても子供を生む人が少なかつたりとか、それが今このまま残っているのですけれども、実はジェンダーギャップ解消というのを全体に網をかけたのは今年度からなのですけれども、そういう議論進めていく中で、今この目標を最初に立てたときにはどちらかというと、提供する行政側の視点でこういうような項目を立てたのですけれども、でもやっぱり本来これは受け手側の県民の皆さんのが視点からこういう項目というのは立てなければいけないよねということで、これは直すことにもうしています。

有配偶率の向上とか、有配偶出生率といったときに、受け手の方々いろんな受け方ありますし、あとはそもそもジェンダーギャップの解消に取り組んでいるときにこういった表記どうなのかということで、これはもう直すことにして、まだこれ外には出していません、多分2月ぐらいに来年度の予算の公表、県は来年度こういうことに取り組みますよという予算を公表するのですけれども、そのときにこういう同じ資料をつくったときには今回頂いた皆さんからの御意見も踏まえて、このタイトルがどうよくなっているかというのを期待して待っていていただきたいなと、少なくともこういうタイトルではなくなっていますので。皆さんからの意見も踏まえながら、そこはやっぱりメッセージ性という意見も今回頂いたのですけれども、まさにどう項目を設けるかによって、伝わり方も違うと思うので、そういうことも意識しながらちょっとここは考えさせていただきたいなと思います。

以上です。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。早くおつなぎすればよかったです。ありがとうございます。

では、もしよろしければ委員の皆様同士で質疑なんかでも面白いのかなと思うのですが、いいですか、私1つ。ちょっと意地悪な質問になってしまふかも知れないのですけれども、細川さんや吉田さん、今県外にいらっしゃる、あと西條さんもそうですけれども、例えば吉田さんが岩手に戻ってきてよと言われたら、まず何がひつかかるのかなとか、細川さんも何で岩手に就職しなかったのかなというのをもしよかつたら率直に教えていただけるとすごくこの後の議論にも結びつくかななんて思うのですが、よろしいですか。

○吉田知世委員 私が大学進学で上京したのは、もともと実家が岩手で自営業をしているというのもあって、商学とかマーケティングみたいなところを勉強したいなと思って、県内の学部とかいろいろ見たのですけれども、商学部みたいなものがなくて、東京の方で商学部経営学科で学んだというのがきっかけです。

その後就職のときに、自分は今映像制作、番組制作の会社にいるのですけれども、それをやりたいとなったときに県内のテレビ局さんはもちろん魅力的なのですが、せっかくやるならば全国に放映されるようなバラエティ番組の制作をしたいということで、今こっちのキー局関連の制作会社にいます。せっかく若いうちはひたすら働け、自分の人生なので、自分のために働きたいことをやろうかなというので、今こっちで思い切り働いているというところです。

いざ岩手に戻ってこないのか、というのももちろん今本当に考えているところで、自分自身岩手も大好きですし、自分が生まれ育ったところで子育てするのが一番イメージもつきやすいし、いいのですけれども、「では仕事はどうする」となってしまうと思っていて、もちろんこの仕事も続けていきたいし、けれども子育て、働く場合の環境がすごく大きく変わるし、あとパートナーの出身地もあるだろうしとなったところで、いつもそこが私の中でひつかかるところだなど、仕事場と子育ての環境とパートナーの出身地と、そこら辺がいろいろネックになって、「よし、岩手に行くぞ」とはまだならないというか、なれないかなと思っております。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。

細川さんいかがですか。

○細川瑠杏委員 私は、実はずっと岩手に就職したいと思っていた、公務員であったりそういうのも考えてはいたのですけれども、実際今の就職先が東京で、岩手でも実は働く企業であって、フルリモートを採用しているところなので、岩手に帰ろうかな、東京にいようかなというのをすごく考えた時期はあったのですけれども、やっぱりそれと同時に副業もしたいというのをずっと自分の中で思っていて、例えば仕事終わった後に2時間だけ飲食店で働くとかという短期間、短時間働く場所ってやっぱり東京のほうが多いです。岩手だと、やっぱりお店の数も家から結構距離が遠くて移動時間がすごくかかるって、結局働きたい時間にその場所に着かなくて働けないみたいな、そういうところがあるなと思って、選択というところでいうと東京の方が選択肢が多いなというのを感じたので、働くうち

は東京でばりばり働いて、後々岩手に落ち着いたときに岩手に戻ってきて仕事ができればなと思っていたところでした。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございました。すごく私は今いいキーワード頂いたなと思って、岩手でばりばり働ける感覚というのを、そうですね、私は岩手でばりばり働いているのですけれどもね。

どうでしょう、佐藤さんみたいなのはちょっと珍しいなと、大学時代に佐藤さんにもいろいろイベントとか手伝っていただいていたのですけれども、何で岩手に戻ってきたのだろうなというのありますけれどもね、いかがですか。

○佐藤格平副部会長 もともと将来は戻ろうと思って一回出ているという感じなのですけれども、岩手に戻ったときに自分のできることとか持っている役割みたいなものをちょっと大きく高めておきたいということで一度東京で働くという経験をした上で帰ろうかなということだったのです。

学生時代、島根県の海士町という移住者で人口が増えている地方創生を体現したような町に行ったときに、「株式会社巡の環」、今は「株式会社風と土と」という会社を経営されている阿部さんという方にお会いました。それこそすぐ岩手に戻るか、一回東京で働いてから戻るかといった迷いがあったときに、「都会で働いた経験があった上で地方の方がいいよ、と訴えるのと、地方の経験しかない中で地方がいいよ、と訴えるのでは、その考えが届く人の範囲が全然変わってくる」という話をされました。一回東京で働いた経験があって岩手に戻ったときに、岩手に戻ってから東京と岩手の価値を相互に比較していろんな人に訴えられる経験をした上で岩手に戻って来ようと思うようになりました。それでもうちょっと東京に居て、働いてみようかなみたいな気持ちになったのですが、だいぶまれな例だと思うので、あまり参考にならないかもしれません。ただ、岩手から出た若い世代の人たちをもっと、たくさんいろんなところで泳がせて、だんだん戻って来ることをもっと推奨したり、それをあまり下心がない形で誘発するための何か動きみたいなものがあるといいのかなと。例えば20代とか30代前半ぐらいまでは東京や県外で働くけれども、だんだんその人のタイミングでU・Iターンしやすくなるように少し懐を広く捉えていったほうがむしろ岩手を選択しやすくなる感覚を強く持っています。

○吉田知世委員 それに関して、先ほど、新卒採用、内定者のお話が牛崎さんからありましたが、県外の大学に行って新卒で岩手に来るというのは、私の周りにはあまりいなくて、企業側からしても新卒の内定者を探って、すごく言葉を選ばないとすると、成長の見込みがあるかないかも賭けと言ったらあれですけれども、結構リスクがあることで、人が不足するときには、中途採用みたいな、キャリア採用を重視していくほうが効率もいいと思いますし、県外で学んできたことを岩手でリターンでき、企業の方も、ベースがある人の方がすぐにでも働き手として活用することもできますし、働く側も岩手に来たいという思いがある方だったりすると思うので、新卒が正義みたいな雰囲気が世の中に残っていると思うのですけれども、キャリア採用みたいなところはもっと逆に押していく方がいいかなと私も先ほどのお話を聞いて思いました。

○牛崎志緒部会長 そうですね、県内の企業さん本当にそういう今動きになっているなど、西條さんがつくれていただいた資料の中にも、キャリア採用の方々をしっかりと活躍できる企業体制にあるかどうかというところはすごく私も大事なことだなと思いました。吉田さんありがとうございます。

いかがでしょう、ほか皆さん御発言もう少しある方、あるいは別の委員の方への御質問でも結構です。いかがでしょうか。

山影さんいかがですか。

○山影峻矢委員 ありがとうございます。別委員への質問というわけではないのですけれども、今までのお話の中で、各企業のキャリア採用の展開みたいなお話もあったと思うのですが、おっしゃるとおりかなと感じております。私自身、銀行員という背景があり、様々な企業様との面談の機会がある中で、キャリア採用に力入れているという話はよく伺っております。そういう中で、ただキャリア採用がうまくいっていない背景として、キャリア採用の方を受け入れるだけの体制、働き方、働く環境、働く賃金、全てを整えることがやはり難しいという話はよく聞くところあります。キャリア採用の方々がUターンしてくるときの強みというのは、それぞれ身につけてきた知識とかスキルにあると思います。なので、ステップアップをしつつ、岩手県内に戻ってこれるというところがメリットである一方で、県内の企業様としてはそれを受け入れる体制を作るのは難しいというご相談をよく伺っております。

そういう中で、どういうアプローチをしていければ企業がよりそういう体制をつくれるようになるのかみたいなところは、さらに議論を尽くしていく必要があるのかなと感じているところです。逆に首都圏在住の委員の皆様から、Uターンすると考えたときに、企業にどの程度の水準を求めるのかみたいなところも考えていただけると、さらに考えやすくなるのではないかと考えます。なかなか的確なアドバイスというのは難しいというのをよく感じるところなので、首都圏在住の委員の皆様から御意見お伺いできると、ありがたいなと感じております。

○牛崎志緒部会長 ありがとうございます。この後の部会のテーマでも雇用環境のテーマありますので、またその場でも皆さんと御議論できればと思っております。

それでは、ちょうどお時間になってきたような気がしておりますが、話し足りない方いらっしゃいませんでしょうか。今日は第1回目ということで、私の拙い進行でございます。一旦ここまで一度皆様、議事の内容を終えまして、進行を事務局にお返ししたいと思います。ありがとうございました。

では、事務局の皆様お願ひいたします。

○本多政策企画課総括課長 牛崎部会長、ありがとうございました。

3 その他

○本多政策企画課総括課長 では、次にというか、本当にその他として何か皆さんから、

全体を通してでもいいですし、次回以降に向けてでもいいですし、何かございましたら発言をお願いしたいのですけれども、いかがでしょうか。よろしいですか。

(発言なし)

○本多政策企画課総括課長 今日いろいろ貴重な発言いただいたのですけれども、事務局としてはすごく皆さんのお意見というのは新しいこともあるれば、今までなかつたような視点からの意見もあったりということで、この会議すごく楽しいなというような率直な感想と、あとは可能性を感じたところなのですけれども、あとは画面を見ながら、今私の目の前に8人の皆さん映っているのですけれども、今日初めてお会いした方も多いのだと思うのですけれども、誰かの発言を受けて、また誰かが発言して、また何かいろいろと広がっていくということで、いろんな若い世代の方とか男性、女性いろいろありますけれども、皆さんで話しすることによって、1対1ではなくて、それがすごく広がるような可能性を感じたところでしたので、また次回以降いろんなテーマでこういう形で議論させていただきたいと思いますので、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

では、その他特になければ、以上で終了とさせていただきたいと思います。

4 閉会

○本多政策企画課総括課長 長時間にわたる審議大変ありがとうございました。本日委員の皆様からそれぞれの御経験やお考えに基づき様々な御意見を頂戴しましたので、本日の議論や皆様から頂いた御意見を今後の政策に反映させていきたいと思います。特に例の資料についてはすぐに直しますので、よろしくお願ひいたします。

次回の部会につきましては、皆様の方に御都合をお伺いした上で調整をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

では、以上で終了したいと思います。本日は大変ありがとうございました。